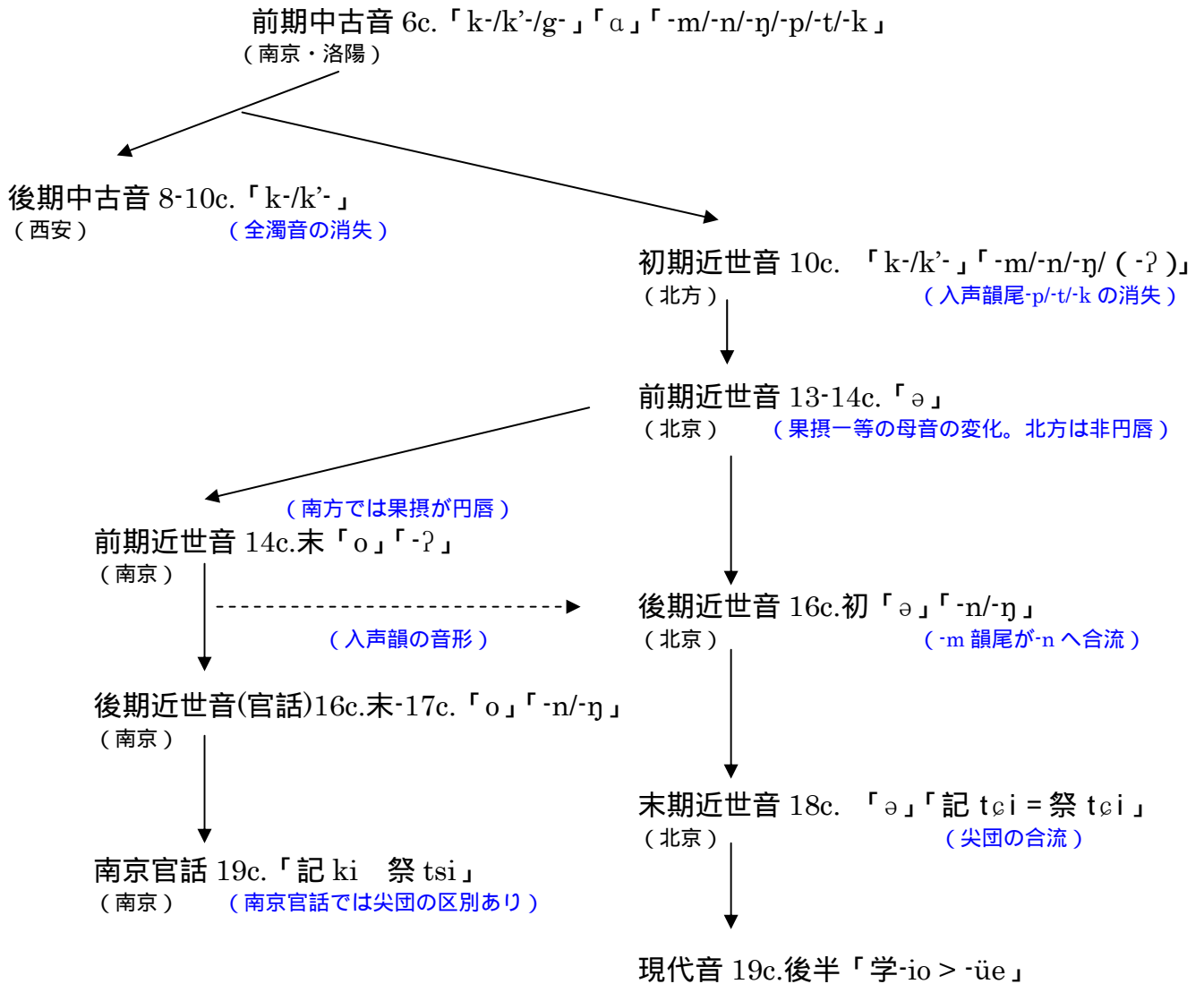


図説漢語音韻史

漢語音韻史を図と表で一覧する。以下には簡略化した音声記号によって、各時代・地域の特徴を示した。中古音以前が含まれていないのは、音韻史を理解するのに必要な資料、とりわけ対音資料がほとんど存在しないためである。以下の図に与えられた音声特徴は、「声母」「果摂一等（「歌」「可」など）の主母音」「韻尾」の主要部分を示したもので、原則として対音資料に基づいている。「樹形図」と「対照表」、そして項目別の「補足説明」を相互に参照すれば、中古音以降の漢語音韻史のあらましが分かる仕組みになっている。

< 樹形図による音韻史一覧 >



< 音韻特徴の対照表 >

	主地域	声母	「哥・歌」	韻尾
前期中古音 6c.	南京・洛陽	k-/k'-/g-	kɑ	-m/-n/-ŋ/-p/-t/-k
		日本呉音「権(ゴン)」	日本呉音「歌(カ)」	日本呉音「略(リヤク)」
後期中古音 8-10c.	西安	k-/k'-	kɑ	-m/-n/-ŋ/-p/-t/-k
		日本漢音「権(ケン)」	日本漢音「歌(カ)」	日本漢音「略(リヤク)」
初期近世音 10-12c.	北京	k-/k'-	(kɑ)	-m/-n/-ŋ/(-?) 契丹小字「略 liau」
前期近世音 13-14c.	北京	k-/k'-	kə	-n/-ŋ/(-?) 至元訳語「哥/gä」
後期近世音 16c.初	北京	k-/k'-	kə	-n/-ŋ/(-?) 翻訳老乞大「南 nan」
末期近世音 18-19c.	北京	k-/k'-/tɕ-/tɕ'- (尖団合流) 清文啓蒙「就 gio」	kə 清文啓蒙「哥 ge」	-n/-ŋ
現代音 19c.後半	北京	k-/k'-/tɕ-/tɕ'- Wade「記 = 祭 chi」	kə	-n/-ŋ Wade「学 hsüeh」
前期近世音 14c.末	南京	k-/k'-	ko 元朝秘史「哥/gö」	-m/-n/-ŋ/-?
後期近世音 (官話) 16c.末-17c.	南京	k-/k'-	ko 西儒耳目資「哥 ko」	-n/-ŋ/-? 西儒耳目資「南 nan」
南京官話 19c.	南京	k-/k'- Edkins「記 ki / 祭 tsi」	ko Edkins「哥 ko」	-n/-ŋ/-? Edkins「学 hioh」

< 補足説明 >

(1) 全濁音

前期中古音では声母の中に全濁音 (= 有声音、上では g- で代表させた) が存在するが、後期中古音以降、その範疇は消滅する。日本漢字音のうち、いわゆる呉音は前期中古音の濁音を明瞭に反映する。「権(ゴン)」「強(ガウ)」「極(ゴク)」など。一方、後期中古音を反映する漢音ではそれらが全て清音になる。「権(ケン)」「強(キャウ)」「極(キョク)」など。

初期近世音の資料は、契丹小字(10世紀に作られたが、現存の資料は11-12世紀のもの)によって記された契丹語の中に見出される漢語語彙であるが、そこでも旧全濁音の無声化が部分的ながら確認できる(資料が限られているため、部分的なものにとどまる)。例えば、ある資料では「齊」(全濁平声)と「漆」(次清)の声母が同じ文字で記される。

(2) 入声韻尾

中古音と近世音を分かつのは、入声韻尾「-p/-t/-k」の有無である。近世音ではそれらの区別が失われる。その際、それらが短い声調として(つまり声門閉鎖音「-ʔ」を伴うものとして)入声という範疇を保っていたか、あるいはまったくその範疇を失って、他の声調に分属していたかは地域・資料によって異なる。

南京では、現代においても「-ʔ」を保っているから、清代以前の時期においても同様であったと考えるのが妥当であり、それは資料でも裏付けられる。主に南京官話によったと思われる明末

の『西儒耳目資』や 19 世紀半ばの Edkins の記録では入声を独立させた五声体系(「陰平声」「陽平声」「上声」「去声」「入声」)である。

一方、北京などの北方地域でどのような状況にあったかを知るのは簡単ではない。複雑な状況に目をつぶって、最も単純に考えた場合、10 世紀以降、現代に至るまで、北方には入声という独立した声調はなかったと考えることは十分可能である。しかし、主に二つの事柄が状況を複雑にしている。第一は、北方音を記録する者たちも、旧入声字は短く発音されるべきだという伝統的な意識に基づいたある種理想の(つまり非現実の)体系を思い描くことがしばしばあり得たということ。第二は、明代以降、北京にも南京の入声韻の音形(「学 hioʔ」など、北方音は「hiau」)が、初めは讀書音として、やがて口語音としても、入り込んでいたということである。以上の二点を考慮した比較的無難な想定としては、次のようなことが言えるかも知れない。北方地域ではかなり早い時期から入声という声調を失っていたが、役人や知識人たちは南京音の影響を受けて、入声を実際に短い声調として発音することもあり得た、と。

(3) 果摂一等開口の韻母

元代以降、果摂一等開口の韻母は、北京で非円唇の /ə/ [ɤ]、南京で円唇の /o/ である。北京など北方音の資料としては、元代の『至元訳語』(漢字音訳でモンゴル語の音声を記したもの)、明代中期のハングル資料(いわゆる『翻訳老乞大』など)、18 世紀の満洲文字資料(『増訂清文鑑』など)があり、南京音を反映する資料としては、明初の『元朝秘史』(漢字音訳モンゴル語)、明末以降の宣教師ローマ字資料(『西儒耳目資』など)がある。

(4) -m 韻尾の消失

前期近世音と後期近世音を分かつ指標は、-m 韻尾の有無である。-m 韻尾が -n に合流するのは明代前期で、その特徴を記す最も早期の資料は 15 世紀半ばに朝鮮で作られた『洪武正韻訳訓』のハングル表記である。この資料では、理論的な正音としては「-m」を標音として掲げるが、注記に「俗音」として「-n」と記している。つまり、当時の実際の北方音では「-n」で発音していたことになる。16 世紀初のいわゆる『翻訳老乞大』『翻訳朴通事』のハングル表音では全て「-n」と記されている。

(5) 尖団の合流

北京における牙喉音の舌面音化(ki > tci など)はすでに 17 世紀に生じているが、18 世紀の満洲文字資料に至って、「祭 tsi > tci」と「記 ki > tci」が同音になるような、いわゆる尖団の合流を明瞭に示す資料が現れる。

なお、南京では、19 世紀中頃から牙喉音の舌面音化が始まるが、尖団の区別はその後も保たれる。現在でも老年層において尖団の区別は「tsi / tci」として保たれている。

(6) -io 韻の消失

近世音と現代音の境界を、ここでは「学」「覚」などの「-io」韻の消失に置いた。ちょうどこの時期(19 世紀中頃)から南京官話は徐々に影響力を失い、北京語が唯一の共通語として確立してゆくことになる。

(7) 時期区分について

通常は元明清の漢語をまとめて近世音と称する。ここでは、それを初期、前期、後期、末期に細分した。すでに述べたように、前期と後期を分かつのは -m 韻尾を有するか否かである。遼・金時代を初期とし、尖団の区別が失われる 18 世紀以降を末期とした。実際には末期近世音の段階を現代音の始まりとしてもよいのであるが、清代を近世音とする伝統的なとらえ方に沿って、末期近世音という区分を設けた。

< 対音資料について >

契丹小字：11-12 世紀の碑文。契丹文字契丹語と漢文の不完全な対訳になっているが、契丹文の中に相当数の漢語語彙が含まれる。現存資料は 11-12 世紀のものであるが、契丹文字は 10 世紀に作られたもの。契丹語にない漢語特有の音声については、時代を下るに従って、表記が徐々に精密化されていったことが分かっている。(cf.清格爾泰ほか 1985『契丹小字研究』中国社会科学出版社。吉池孝一 2003「漢語の精母系子音を表わす契丹小字について」『KOTONOHA』13号)

『至元訳語』：13-14 世紀の資料。『事林広記』に収められている。漢字音訳でモンゴル語を表記したもの。(cf.長田夏樹 1953「元代の中・蒙対訳語彙『至元訳語』」『長田夏樹論述集(上)』ナカニシヤ出版 2000 所収。吉池孝一 2005「哥葛などの元代音について」『KOTONOHA』36号)

『元朝秘史』：14 世紀末の資料。漢字音訳でモンゴル語を表記したもの。(cf.小沢重男 1994『元朝秘史』岩波新書)

『翻訳老乞大』・『翻訳朴通事』：16 世紀初に朝鮮で作られた資料。漢字にハングルで表音が付されている。(cf.中村完 1961「『朴通事上』の漢字の表音について」『朝鮮学報』21/22 合併特輯号)

『西儒耳目資』：明末の韻書。ローマ字で表音されている。おおむね南京官話の音韻体系を反映すると見られている。

『清文啓蒙』：数種のテキストがある。ここで用いたのは、18世紀半ばの『兼満漢語満洲套話清文啓蒙』(東洋文庫蔵)。各漢字に満洲文字による表音が施されている。(cf.落合守和1989「翻字翻刻《兼満漢語満洲套話清文啓蒙》(乾隆26年,東洋文庫蔵)」『言語文化接触に関する研究1』)

Edkins1857: *A Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin dialect*, Shanghai.

Wade1886: 『語言自邇集』第2版。『中国語教本類集成』不二出版 1991 所収。

(終わり)

この項目は中村雅之が担当しました